

第2章 不思議な雑木林

みかけない女の子

昨日の夢がまださめやらぬ一日も、また夕暮れが近づいてきました。

「さよなら、またあしたね」

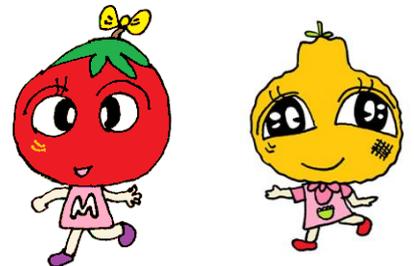
エイミーはバーバラ、トミーの順に別れを告げて、市場を過ぎようとしていました。

「あれ、見かけない子ね・・・」

もう屋台もない市場の広場に、ふと小さな女の子が2人で歩いていました。まだ夕刻も早い時間なので人も多く、みんながその子たちを、遠巻きに見ています。

【どうしたのかしら？】

心配なのでその人の輪のところまでやってきて、隣の人に話をしました。



「どうしたのですか？ なにかあったの？」

「どうしたのって、あの子たちはいったい何者だい？ あんな恰好をして・・・」

10数人の市場に来ている人たちが、その噴水のある前にいる2人の女の子を少し遠巻きに輪を作って、こわごわ見えています。見たところまだ子供のようなですが、まるでトマトとミカンのような顔に大きな目、誰かがぬいぐるみでもかぶっているようにも見えます。でも

目はパチパチと動きます。お互いに話しているのか、口も動いています。

「人形劇団でも来ているのか？」

「それにしちゃ、よくできすぎた人形で、生きてるみたいで少し怖いな」

みな口々に思ったことをいっていますが、劇団など周りを見渡しますが、そんな気配もありません。好奇心いっぱいのエイミーは、思い切って近くに寄って話をしました。

「こんにちは。あなたは見かけない子ね？なんてお名前かしら？」

『・・・・・・・・』

2人は何もしゃべりません。エイミーはもう一度たずねました。

「あなたたちはどこから来たの？なんてお名前？」

2人はお互いに顔を見つめ、エイミーの方を向いて答えました。

『わたしたちはあなたのお友だちよ』

2人が同時に話したので、美しい双子の声のハーモニーに聞こえました。



「あら素敵な響きね。で、お名前はなんていうの？おかあさんといっしょに来たの？」

エイミーはもう一度たずねました。

『わたしたちはあなたのお友だちよ』

とまた同じことを2人が言って、人の輪の中をくぐり抜けエイミーの家の方向に走って行ってしまいました。集まった人たちも、きよとんとして、2人が走り去って行くようすを見ていました。

「いったい、あの子たちはなんなんだろう？」

「どこかの劇団かなんかじゃないのかな？」

「宣伝のために、あんなぬいぐるみをかぶってさ」

人々はそんなことをいいながら、さほど気にしていないようすです。みな噴水を後にしました。エイミーも、その噴水が長い影を作り始めた市場の広場で、1人ポツンとしてしまいました。【なんだったんだろう？】と思いながら、さほど気にもせず家に帰って行きました。

あと5分も歩けばエイミーの家です。でもなぜか、昨日の夢が気になって仕方ありません。

【よしっ、少し近くまで行ってみるか】

エイミーは街外れの一本道の最後の角を、家の方には向かわずに山の方向へ行くために右に曲がりました。



【すこしだけだから・・・ねっ】

不思議な雑木林は街から歩いて、20分ほどのところにあります。ですが絶対に近づいたら危険いわれているので、誰もここに来る人はいません。しかも光る入り口から10メートルくらい離れたところに始めの柵が、それからまた10メートルくらいのところに2番目の柵

があります。2重に柵があります。入ろうと思えば入られますが、恐ろしい、いい伝えがあるので、誰も柵の中に入る人はいません。

そろそろ日も陰り、あたりはうっすらと暗くなってきたその時でした。エイミーが柵の中を見ると、なにか人影がありました。

「あら、あなたはさっきの、・・・その・・・、友だちさんね？」

内側の柵の中にさっきの女の子が2人立っていました。何かを待っているかのようです。



「おーい、こんなところへきちゃあだめだよ」

エイミーは柵の外から、10メートルくらい離れた2人に声をかけました。

「とはいうものの、あたかもここにいるだけ」

少しづつが悪そうに、もう一度柵越えに大きな声でいいました。

「もうすぐこの辺はまっくらになるよ。そうしたら今夜もお月さまが明るいから、林が光って大変なことになるよ」

エイミーは何が大変か分からないまま、その子たちに戻るように話しました。ちょうどその時でした。林の中でポーと光が点滅しました。2人は内側の柵も超え、その光る方向へ向かって走って行きました。そしてエイミーの方を振り向いて、こういいました。

【だいじょうぶだよ。わたしたちは、この林の向こうに住んでいるのよ。こうして暗くなったから帰って行くの】

エイミーにはそう聞こえました。

【だ、だって・・・】

エイミーは少しびっくりして、声が出ませんでした。

【このことは秘密にしてね。わたしたちの家は遠いから捜さないで。いいよね、絶対に秘密だよ】

心の中にそういわれた気がしたエイミーでした。2人の女の子は光る木の方へ歩いて行ったかと思うと、もう見えなくなりました。

【いたっ！】

エイミーはほっぺをパンパンはたいてみました。

【今のは夢じゃないみたい。でも絶対にあの女の子は、私に話をしたわよね。だって聞こえたんだもん】



もうあたりはすっかり暗くなっていました。満月は東の方から、昇っていました。一番星もいっしょに輝いています。エイミーは大あわてで家に帰りました。10分ほどで家に行く曲がり角に着きました。そこにはアンおばあさんが待っていました。

「エイミー、どうしたの。こんなに暗くなるまで・・・。それに帰ってきた道が違うじゃない。あっちにはこわい林があるのよ。まさかそれを見に行ったんじゃない・・・」

「・・・ち、ちがうよ。考え事をしていて、うっかりあっちへ行っちゃったんだ」

そういつてみたものの、アンおばあさんには、エイミーが不思議な光る雑木林にいったことがわかりました。光るものが風に乗ってきたのでしょう。エイミーの背中が少し光っていました。でもその光は今にも消えそうで、2人が家に帰るころには暗くなっていました。

「とにかく、あっちはいっちゃだめだよ。さあ、今夜のシチューはとっておきのお肉がたっぷり入っているよ」

「わあーい、やったあ～～」

「トマトもおたべよ。お肌がいいんだからね。そろそろ、そういう年ごろだしね」

「年ごろって？」

「だんだん、女の子がきれいになって行くっていうこと」

「へえ～～、そうなんだ」

実はエイミーは小さい頃から少し偏食がひどく、アンおばあさんの育てるトマトでさえ食べることはありませんでした。困ったおばあさんはそれまで栽培していた大きなトマト以外に、黄色や白色や黒色の小さなフルーツトマトを育てることにしました。これが結局よく売れるようになり、エイミーの偏食が思わぬ効果を生んだようでした。

「ブラックリコピーナだけは本当においしいね」

「たくさんお食べよ」

食事も終わり、早めにベッドに寝ながら一体あの女の子たちは、誰だったんだろう？夢じゃなかったし、あの子たちはだいじょうぶな

のかな？そう思いながらも、今日はたくさん歩いたエイミーでした。すぐに深い眠りにつきました。

おしゃべりトミー

マロン村は月曜日の朝です。エイミーはアンおばあさんと別れて、いつものように学校へ通います。みんなと歌をうたいながら、街並みが少し途切れたころトミーが合流します。

「おはようトミー」

エイミーは歌の途中で、トミーにあいさつをしました。

「おはようエイミー」

トミーも元気な声で答えます。トミーはエイミーの歌を妨げるのを、申し訳なさそうのように話し続けました。

「ところでバーバラがいないうちに、いうんだけどさ。あの不思議な雑木林の付近で、子供を見かけたってうわさがあるんだ。ついこの間だよ。市場にも変な女の子がいたっていうしさ」

「あら、そう・・・」

エイミーは少しとぼけています。

「エイミーは家が近いから、何か知っていないかと思ってさ」

「・・・」

エイミーは少しの間だまってしまいました。



「どうしたの。気分でも悪いの」

トミーが心配そうに顔を見ていました。

「うん、まっ、いいか。話してあげる。
でも絶対に秘密だよ」

エイミーは人差し指を口の前に1本立てて、トミーの顔をじっと見ていました。

「な、なんだよ。おいらの口の堅さは、
算数の先生の石頭よりかたいぜ」

「それが心配なんだけど、まあいいわ。実はその女の子に、会ってしまったの。それも2人いたの。まだバアにも話していないわ」

「ええ〜〜〜！」

トミーはびっくりして思わず大声を出してしまいました。

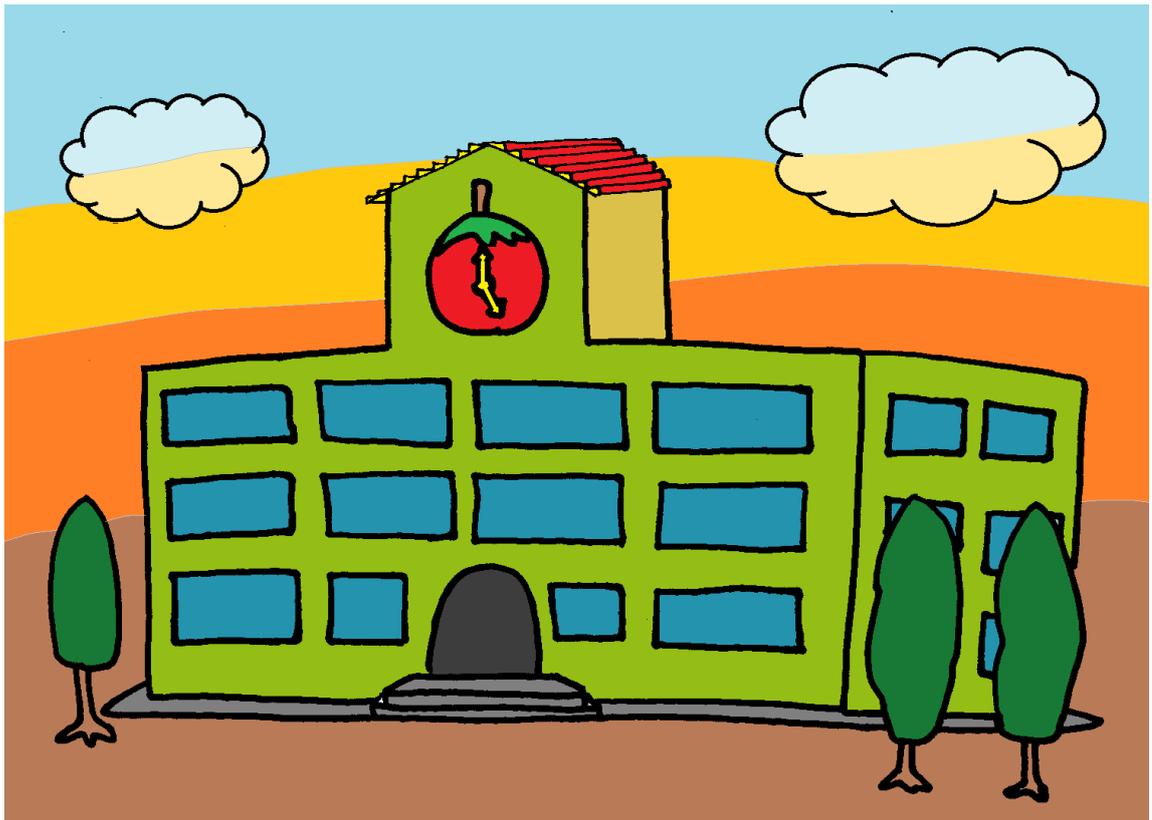
「あんた、ちょっと、静かに・・・」

「ご、ごめん・・・、そ、それで・・・？」



「実はその雑木林の夢を見て気になって、満月の次の日に行ってみただ。で、その前に夕暮れの市場であった見かけない女の子が、その雑木林にいたの。柵の中にいたのよ」

「柵の中は入れないぜ」



「市場で名前も聞いたわ。でも何度聞いても【あなたのお友だちよ】っていただけなの」

「変な話だな。そ、それで・・・？」

「こんなところにいちゃ、だめだよっていったら、林の向こうが家だからって、林の中へ入って行ってしまったの」

「だ、だいじょうぶかな・・・」

「あっ、もうすぐバーバラが来るわ。このことは絶対に秘密よ。バーバラは心配性だから、話しちゃダメ」

「わ、わかった。」

こうしてバーバラも一緒になり、また歌を歌いながら、マロン小学校に入って行きました。

夕方近くです。下校の時間になりました。なぜかバーバラが、少しムツとしています。

「バーバラ？ どうしたの？ なにかあったの？」

エイミーがたずねました。

「仲間外れにしなくてもいいじゃない？」

「なんのこと？」

「さっきトミーが話したわよ。不思議な雑木林のこと。あんたが林の前で、不思議な女の子に会ったって、得意そうに言ってたわよ」

「あいつめ・・・」

「まあでも、わたしもこわがってばかりいちゃ、いけないかもしれないわね」

バーバラは、少し反省したかのようにいいました。

「・・・ど、どうしたの？」



「きのう、お父さんがいったの。不思議な雑木林の話を・・・」

「なんて？」

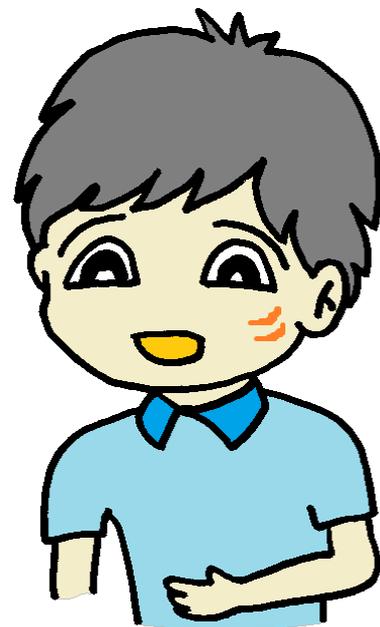
「満月の夜の光が今月は、特に強かったんだって。なにか恐ろしいことでもあるのではないかって、大人たちはいってるわよ」

「へえ、知らなかった」

女の子に会ったのは、5日ほど前のことです。アンおばあさんは何も話してくれないのですが、不思議な雑木林の光が街中のうわさ話になっているようです。そこへトミーがやってきました。

「トミー、あんたね・・・！」

ご、ごめん。ほらバーバラを安心させようと思ってさ、小さな女の子でも近づいて大丈夫だっていおうと・・・



「まあ、いいわ。あんたの口の軽さは、あの夕焼け雲よりもっともっと軽いんだから」

エイミーは笑いながらトミーの顔を、指さしていいました。

「でもエイミー、おかげで私も少し勇気がわいてきたわ。自分ひとりで考えてこわがっていても、しかたないってわかったわ」

「だろう。おいらのおかげだね」

「トミー！」

エイミーが口をへの字にしていきました。

「ご、ごめん・・・」

「今度、大きくなるのは来月の満月の日ね。後3週間ちょっとはあるわ。その光る前に今度休みの日に行ってみましょ。何かあるかもしれない」

エイミーは好奇心いっぱいでした。

「ええ～～？突然そうなるの・・・？」

バーバラはまだ心の準備ができていません。

「やった。いこう、いこう！」

昼間の雑木林で

土曜日がやってきて休みの日になりました。エイミー、バーバラ、トミーは市場からエイミーの家に行く一本道の、分かれ道で待ち合わせをしました。

「トミー、あんたなに持ってんのよ？」

エイミーが見ると、トミーは棒きれを1本ずつ両手に握っていました。

「サムライだよ。何かの本で読んだことがあるんだ。BUSHI（武士）ていうんだ。悪いやつに会ったら、おいらがこれで退治してやるからね」

トミーは得意そうです。

「まったくあんたってのは・・・石頭の上に、ノー天気ね」

バーバラが、あきれたようにいいました。こうして3人はその雑木林の近くまでやってきました。2重になった外の柵が見えてきました。

「あっ、誰か来る。かくれよう」

トミーがそういったので、道から外れた牧草の中に隠れました。近くを馬車が通り過ぎて行きました。

「見つからないように、このまま牧草の中を進んで行きましょ」



エイミーがいいました。もう外の柵までは20メートルほどです。

「よし、柵を乗り越えるぞ」

トミーが得意になり、先に柵の上に上がり、向こう側に飛び降りました。

「簡単だから、はやくはやく、エイミーもバーバラも」

柵の高さは、1メートル50センチメートルくらいあります。10メートルくらいの間隔で太い丸太が地面に刺さり、その中を細い丸太で区切って入れないようにしてあります。しかし実際に乗り越えるのは簡単です。もともと誰もこわがって、柵の中に入らないのですから、あまり人が乗り越えることを考えていないのでしょう。

3人はさらに、5メートルくらい内側にある、同じような柵も乗り越えました。もうあの光る場所まで20メートルくらいです。

「いよいよだな。エイミー、さ、先に行っていーいぜ。ビギナーズラックは、き、君にあげるよ」

トミーは少しこわくなってきました。

「あんた、さっきの勢いはどうしたの？そのどっかで見てきたサムライってのは？」

「そ、そら、そうだけどさ。ここまで近づいたことないから。あっ、エイミー、ま、まって〜〜〜」

トミーとバーバラが話しているうちに、エイミーはどんどんと林に近づいて行きました。トミーとバーバラも後を追いかけます。

「ここが、その光るってところかしら？」

エイミーは林の一番外側の木を手でさわりながらいいました。

「エイミー、だいじょうぶかよ、そんなのさわっても・・・」



トミーがいました。

「そうよ、なにか変な病気でもうつったら大変よ、エイミー」

「とにかくこのへんだわ、光っている場所は。他との違いを見つけるのよ」

「さっ、さっすが、学級委員のエイミーだ」

「トミー、こんなときに、変なほめ方しないの」

バーバラが、トミーの肩にポンと手をあてていました。



「で、エイミー、何かわかったことあるの？」

「特に、何も、変わった様子は、見あたらないけれど・・・」

そういつてエイミーはその場に座って、バッグの中からもなにやらいろいろと取り出しています。

「あんた、なにやってんの」

バーバラがのぞきこみます。

「その辺の草や、木の皮を集めてちょうだい。こっちの白いパックには光っていない場所の草木を、こっちの黄色いパックには光っている草木を入れてね」

「あんた、エイミー、ほんとにトミーのいう通り、さすが学級委員さんだわさ」

「まだ、あまり中に入らない方がいいわね」

エイミーは林の中に1メートルほど入って、そのあたりの木の皮や土に生えた草やコケを集めて、バックにしまいました。

「で、あんた、それどうすんのよ。まさか学校へ持ってく気？じゃないよね？病気が移ったら大変だよ」

「だいじょうぶだよ。家で少し観察してみる」

「でも、だいじょうぶかなあ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。だって、夢の中で素敵な光を見たんだもん♪」

エイミーはそれを大事そうにバッグにしまい、3人は再び柵をこえて、雑木林を後にしました。

「さあ、今日はピクニックに来たんだ。さっそくゴハンを食べようよ。おなかすいちゃった」

トミーがいました。

「あんたは食べることと、遊ぶことと寝ることだけね」

バーバラがからかうようにいいます。そうです、本当は今日はピクニックに来たのです。3人はお弁当を大きな切り株の上に広げ、お昼ごはんにしました。

おいらは
おにぎりだよ

わたしたちは
サンドイッチよ

